

カムチャツカに北洋漁業の足跡を訪ねて

日本人と先住民の意外な関係

北海道立北方民族博物館学芸主幹

渡部 裕

日本人が北サハリンから沿海地域、カムチャツカにいたるロシア領内に漁場を設けて漁業を行っていた時代があった。それらは北洋漁業とも露領沿岸漁業とも呼ばれていた。露領で漁業を行おうとする者は、ウ

ラジオストックにおける入札で希望する漁区と付随する海岸の土地を借り受け、多くの場合、漁区内に一つの定置網を設置してサケを漁獲し、塩蔵加工あるいは缶詰加工を行った。筆者はこれまでカムチャツカ先住民の伝統文化に関する現地調査を行ってきたが、しばしば、日本人漁業者に関する記憶が先住民社会に語り伝えられていることに注目するようになった。こうしたことが語り伝えられていることはちょっととした驚きであった。日本人漁業が終焉して五〇年以上も経過していたからである。

カムチャツカの先住民社会に伝えられる日本人漁業者に関する情報は、直接体験したものから一世代あるいは二世代前の記憶が語り伝えられているのまで含まれる。季節的であるがカムチャツカ沿岸に一人を越える日本人が居住してサケ漁やその加工に携わっていたことは、現地の人々にとって大きな出来事であ

ったにちがいない。その初期においては日本人と現地の人々との間に自由な交流もあったのである。

これまでロシア領内における日本の漁業は主に産業史的観点から記述されてきた。有史あるいは鮭鱒漁業、カニ漁業、缶詰生産といった経営的な側面からである。文化人類学の立場から、こうした資料では先住

民との交流について触れる部分も少なく、なによりも日本側の資料からは日本人が現地でのどのようにみられていたかは知るすべがない。本稿および次号では現地の人々からみた日本人漁業の記憶をたどることから、日本人と先住民のかかわりを明らかにし、日本人のイメージが先住民社会にどのようにとらえられていたかを報告したい。



日本の漁場址に遺された船揚げ用ウインチの一部と伝えられる／カムチャツカ東海岸オソソラ村





カムチャツカ川河口の町ウスチ・カムチャツカ。かつて日口双方の漁場、大型缶詰工場が建設されていた。



「イヌノカワ、クマノカワ、キツネガワ…」と語ってくれたコリヤーク女性ウパロヴァさん（右）／オツソラ村

情報との出会い

最初に耳にした日本人漁業時代の情報は、「日本の工場のコンクリートはロシアのものに比べて固く丈夫だ」という内容であった。また、「日本人が来て工場を建て、コリヤークに魚（サケ）の捕り方を教えたので、コリヤークは海で魚を捕ることをおぼえた。」とも付け加えた。

この情報を語ってくれた人物は一九九七年に初めてカムチャツカを訪れた際に聞き取り調査に協力してくれたコリヤークの男性・コリヤさんである。カムチャツカ半島には北部にコリヤーク（生活基盤によって海岸コリヤークとトナカイ・コリヤークの二つのグループが存在した）、南部には狩猟漁撈民であるイテリメンが居住してきた。さらに、半島中央部（現在のエツソ村、アナブカイ村周辺）にトナカイ飼育民であるエベンが大陸から半島北部を経由しておよそ一五〇年前に移住してきたとされる。

コリヤさんはカムチャツカ半島北部東海岸の旧アナブカ村の出身であるが、この村はソ連の経済政策の改変から一九七〇年に閉鎖され、住民は再びさまざまな村に分散して移住することを余儀なくされた。「再

び」とはアナブカ村は一九五九年に新しいコルホーズの建設にもなつて造られた村であり、新たな住民はさまざまな村から集められた人たちだったからである。コリヤさんに会ってからは、先住民の人々への質問には必ず日本人漁業時代のことを含めるようにしてきた。

ロシア領内における漁業

カムチャツカの日本人漁業と先住民の関係を検討する上で露領沿岸漁業あるいは北洋漁業の歴史の概略を確認しておきたい。ロシア領内における日本人による漁業は「北洋漁業」とも呼ばれたが、日露戦争終結にともなう講和条約によって認められた「ロシア沿岸における水産資源を獲得する権益」であった。その権益を具体化する交渉が行われ、一九〇六（明治四〇）年に日露漁業協約が調印された。この交渉過程でロシアは水産資源に海獣類が入らないことを強く主張し、最終的には対象から除外されたが、このことは資源に対する当時のロシアの価値観をよく顕している。ロシア領内における日本人漁業の権益はソ連体制になって

も基本的には踏襲されたが、一九四五（昭和二〇）年八月のソ連対日参

戦により消滅した。

日露漁業協約にもとづく出漁にさきがけて、サハリンや沿海州さらにカムチャツカへとサケを求める日本の動向が後の北洋漁業に重要な役割を果たしていた。カムチャツカ半島における豊富なサケ資源の情報から一八九七（明治三〇）年に日本船が出漁したとされ、一九〇〇（明治三三）年にはサハリン・沿海地域から転向した漁業者が大挙して出漁し、日本船による密漁なども横行したとされる。しかし、本格的な日本企業の進出は日露漁業協約の成立以後である。北洋漁業における多くの漁場は北海道および北陸の各漁業資本により個別に経営されてきたが、しだいに有力資本が台頭するようになった。

その後、カムチャツカにおける企業はロシア革命を契機として再編され、一九二一（大正一〇）年に堤商会を中心し合併・合同し、さらに一九三五（昭和一〇）年頃までにその他の北洋企業を吸収・合併し、日魯漁業株式会社にはほぼ一本化され、その漁区や工場はカムチャツカ西海岸北部や東海岸北部まで拡大された。

ソ連は政治体制の確立とともに積極的にカムチャツカの経済改革に乗



ペンジナ湾に位置するソ連の漁場に日本人労働者を送り込むしどにい丸/1930年7月撮影/バラナ村・コリヤーク郷土博物館蔵

り出し、漁業についても国営企業を設立し、労働人口の増加策をとった。それまで日本企業は圧倒的に多くの漁区を占めていたが、借区料の高騰や漁獲制限などが加えられるとともに、ソ連側の漁区、加工施設も増大した。

母船式漁業の誕生

ソ連は露領における日本の漁業権を追認したが、新たに締結された日ソ漁業条約では、さまざまな制約や新たな課税措置によって、日本企業は大きな経営コストの増大を強いられ、経営の合理化が模索されるよう



トナカイの群/アナブカイ村

になった。その方策の一つとして、規制を受けない領海外での漁業を行うことが検討され、領海外で漁獲と加工を行う母船式漁業が考案された。最初に一九三三(大正一二)年頃からタラバガニ漁で実用化され、その後、刺網の改良によってサケの流網漁が実用化され、一九三三(昭和八)年頃から母船式サケ漁が本格的にはじまった。これら母船式漁業のなかでソ連は一九二八(昭和三)年に日本人を雇用して初めて母船(カニ工船)式カニ漁を実施し、その後カニ工船の数を増やしていった。これら母船式漁業は戦後再び北洋で活躍することになる。



かつて日本の漁場があったバラナ川河口/西海岸バラナ村

日本人と先住民の交流

これまで五〇人ほどの人びとから、かつての日本人漁業に関する聞き取りを行ってきた。日本人と先住民との接触のあり方は、ソ連邦の成立前後で異なるが、日本人との友好関係が語り伝えられている。日本企業は自ら漁獲したサケに加え、先住民が漁獲したサケを買い上げた。漁獲向上のため、日本人は先住民に対して漁具の製作や漁法の指導なども行った。また、日本の漁場労働者、



東海岸カラガ村近郊の砂丘に点在する日本製機器の残骸。かつての冷凍工場の址とみられる。

飲料、ナイフ等の鉄製用品、銃器などと交換した。イテリメン社会に米食や日本製の背広の着用が普及するようになったと報告されている。また、先住民が狩猟した毛皮も売買の対象となった。さらに、先住民は日本の拠点漁場に配置されていた医者の治療を受けることができた。

このような日本人と先住民との濃密な接触は、ソ連体制の確立とともに規制が加えられるようになった。日本人労働者は借区外へ出ることを禁止され、また漁場番人として日本人が越冬滞在することも禁止された。このことよって日本企業の労働者と先住民との接触はしだいに規制され、接触の機会も少なくなったと考

ベンジナ湾にてしどにい丸から降ろされた和船／1930年
1月撮影／パラナ村・コリヤーク郷土博物館蔵



後に日魯漁業株式会社となる堤清六、平塚常次郎が創業した堤商会の看板／函館市弁天町

えられる。日本人労働者は東日本の農山村の出身者が多く、現在からみると劣悪な労働条件のもとで働いた。先住民にとってこれらの日本人は雨や風を厭わず出漁する日本人、よく働く日本人、快活に笑う日本人という印象でとらえられた。ことに医療をめぐる関係はきわめて大きな意味をもつていたことは想像に難くない。

聞き取り調査の事例からカムチャツカ先住民と日本人との接触のあり方は以下のようにとらえることができる。これらの情報は直接インフォーマントが体験したものも含まれているが、多くは世代から世代へと語り継がれているものが多い。さらに、こうした情報はあたかも本人が直接見聞きしたかのように語られることが多い。つまり、日本人漁業者との接触は個人的体験というより先住民社会全体が時代を超えて共有する体験なのであろう。

- ・サケの売買関係・先住民が漁獲したサケを日本人が購入した。この事例はウスチ・カムチャツカでよく知られている。
- ・漁業の技術指導・先住民に網の作り方や漁業技術を教えた。
- ・先住民の雇用・先住民の一部は日本の漁場に雇用されて働いた。
- ・毛皮の売買・先住民が捕獲した毛皮獣の毛皮を日本人が購入した。東海岸北部のオツソラ村に住む二人のコリヤークの女性がそれぞれ「イヌノカワ、クマノカワ、キツネガワ、トランキガワ（トナカイ皮のこと）」という日本語を覚えていた。
- ・漁場の番人・冬季の越冬番人として先住民が日本企業に雇用された。
- ・医療をめぐる接触・先住民は拠点漁場に配置されていた医者の治療を受けることができた。また、日本の漁場に薬品をもらいに行つたという（目薬の事例が多い）。
- ・ロシア／ソ連企業における日本人の雇用・ロシア／ソ連企業に雇用された日本人と先住民との関係はあきらかではないが、一定の交流があったと考えられる。少なくとも日本の企業と誤解されていたほど日本人が多く働くソ連の工場があったことは推定される。
- ・棄国者の日本人との婚姻関係・カムチャツカに漁場の労働者としてではなく居住した日本人が存在した。棄国者であったかどうかは分からないが、なんらかの理由で現地に留まった日本人であり、先住民社会のなかでひっそりと生活していたものと推定される。（以下、次号にて）

ファーストステップ

**当行ATM
時間外
手数料無料**

**道銀取引優遇サービス[ステップドゥ]。
お取引に応じて、オトク度が3段階に
ステップアップする、
道銀ならではのサービスです。**

各サービスの適用にはお取引条件がございます。

道銀取引優遇サービス[ステップドゥ]

ステップ

Do

どさんこバンク
北海道銀行
平成9年10月5日現在

お申し込みはカンタン! 詳しくは窓口または当行ホームページにてご確認ください。
<http://www.hokkaidobank.co.jp>